

家族の工場を守るために
極悪金満デカチン社長の
女になつた地味お母さん2
（堕ちる母編）

045

この作品はフィクションです。

実在の人物・団体・事件等とは関係ありません。
また登場人物は全員十八歳以上です。

登場人物

平口 清香（ひらぐち きよか）

母。四十三歳。色気のない黒髪ポニーテール。工場を守るために極悪社長之女になった地味お母さん。

平口 明隆（ひらぐち あきたか）

息子。家族の工場が大好きでずっと働きたいと思っている。母が社長にエロいことされる様を見せられる。

平口 哲雄（ひらぐち てつお）

父。五十歳。工場長で経営者。小柄で細身だが、威厳ある父親。妻が社長之女になってからはすっかり意気消沈している。

平口 萌香（ひらぐち もえか）

妹。普段は生意気だが、本当は家族
思いの優しい子。社長を心底キモが
っている。

新田 剛蔵（にった ごうぞう）

工場の得意先を買収した大会社の
社長。大金持ちだが、デブハゲチビ
で外見は終わっている。超デカチン。

田代 希美（たしろ のぞみ）

新田社長の秘書。眼鏡の大人しい女
性。新田社長の女。

前回のあらすじ

明隆のうちは家族経営の小さな下請け工場。彼は家族の工場が大好きで、ずっと守っていきたいと思っていた。

しかし唯一の得意先が買収されたことにより危機が訪れる。新会社の社長は工場との契約を続ける代わりに、なんと明隆の母に自分の女になることを要求してきたのだった。

工場を守るため、ハゲデブキモ社長の女になることを決意する母。そして一度抱かれることと引き換えに解放してもらおうとするが、強かな社長の計略にはまり見事騙されてしまう。

さらには食事会で夫が社長に働いてしまった無礼を母は体で償うことに…。中出しまでされるが、社長は許してくれず、今度は息子同伴のデートを要求してきたのだった…。

土曜日の午前中。少し郊外の方にある、どこか寂れた動物園。人の姿がまばらなのは不幸中の幸いだった。

「……………」

すぐ目の前の光景に、僕はさつきからずっと気を失いそうになっている。

お母さんと社長が、腕を組んで歩いていたのだ。僕はやや後ろをついていき、その背中をじっと見つめていた。

醜いハゲデブチビの社長はいつもの悪趣味なド派手スーツ姿。そしてお母さんの方は、社長の指示で例の如くともない格好をさせられていた。

トップスは、まるでビキニ水着みたいな服だった。異様に丈の短いチューブトップで肩もお腹も丸出しになり、ほとんど胸回りしか隠され

ていない。それなのに大きな胸の谷間まで大胆に晒されている。

下は当然のようにパンテイスレスレのタイトなミニスカート。そこからパンストに包まれた足がなんとも色っぽく伸びる。上下とも目が覚めるような鮮やかな青色で、黒髪ポニーテールの地味なお母さんにはまるで似つかわしくない服だった。

当然社長の命令だからだけど、お母さんは彼の太い左腕にギュツとしがみつки、そして必要以上にその体を密着させているように見えた。あまりにも恥ずかしくて、そうやって周囲の視線から少しでも身を守っているつもりなのかもしれなかった。

「…はあ…ゴクツ」

緊張と不快感で、唾を飲む。例の、僕同伴のデートの当日だった。食事会でお父さんが社長

に働いてしまった無礼に対する、贖罪の続きである。僕に動画を見られているなんて知らないお母さんは、あの翌日、改まった顔で頭を下げてきた。

お母さん自身、僕を巻き込むのはとても心苦しそうだったけど、息子達には秘密の多額の借金もあり、なんとしても工場を死守しなくてはならない彼女は、社長とのデートについてくるよう正直に僕にお願いしたのだった。

勿論嫌に決まっていたが、僕としても断るわけにはいかなかった。お母さんの決死の頑張りも見せられていたし、僕だって家族を守りたかった。

『…本当にごめんね、明隆…苦労ばかりかけて…』

一番苦労しているのは間違いなくお母さんなのに、僕を思っただけで半泣きになっていた。そん

な彼女を見ていると、弱音なんて吐けなかった。

『…大丈夫…きつともう少しだから…お願い…お母さんを信じて…』

そして一週間後の今日。工場までリムジンが迎えにきた。お母さんは社長指定のふざけたデパート服に着替えさせられ、僕達はリムジンでこの動物園に連れてこられた。車は外で待っている。秘書の希美さんも車にいた。

「……………」

今日の詳細について、僕は社長からなにも聞かされていなかった。今のところは通常のデートっぽい様相を呈しているけど、社長がそれで許してくれるわけがない。きつととんでもないやり方で、僕とお母さんをいたぶってくる。

僕はもう充分に、それを知っていた…。

「……ゴクリ」

「しっかししょうもない動物園やな。おい清

香、お前ら家族でここ来たことあんのんけ？」

「いえ：ありません：」

社長とお母さんが腕を組んで歩きながら会話を始める。僕は黙って少し後ろを歩く。

「そうか？：お前らみたいな貧乏人にはこれくらいのところが丁度ええ思て選んだんやけどな、失敗やったかもしれへんな。いくらなんでもしょうもなすぎておもしろいことなんもあらへんわ！がはは！まあでもええか？自分の男とデート出来るんやったらどこでも楽しいわな、なあ清香？」

お母さんは答えない。

「返事は！」

「：は：はい：」

社長に威圧され、仕方なくそう言う。

「なはっ！そうやろ？自分の男と一緒にやったら、それが例えどんな場所でも楽しいもんや？」

なあ？」

「……はい」

「にひ！おい、聞いたか明隆？」

社長はいきなり、首を捻って振り返り僕に言ってきた。二人の足は止まっていた。僕もそれに倣う。

「お前のお母ちゃん、わしとのデート楽しいらしいわ？ほんでわしのこと自分の男って認めとるで（笑）？なはっ！お父ちゃんっていうれっきとした夫がおんのに、よそに男作っとなねんで、こいつ。悪いお母ちゃんやなあ〜♪」

「ぐっ…」

僕は唇を噛みしめる。社長の女になったお母さん。もはや周知のことだった。それを反転させただけなのに、この心のダメージはなんなのだろう…。

「ひひっ…」

さらに社長は、お母さんになにやら耳打ちする。

「はあ！そ…そんな！出来ません！」

信じられないといった声で拒絶するお母さん。動画で社長のやり口を知っている僕は、彼がお母さんになにかとんでもないことを言わせようとしているのだとわかってしまう。

それもきつと…僕に対して。

「…ゴクッ」

二人は僕に背を向けたまま会話を続ける。

「はあ？出来ひんやと？…お前工場どうなつてもええんか」

「そんな…ああ…か、堪忍してください、社長…息子を…明隆を巻き込むのは…」

「おい勘違いすんなよ。お前はあのアホ夫のわしへの無礼の贖罪のために今このデートしてんねんぞ？それはもうありえへん無礼やった

はずや。それはお前もわかつとるな。だから本来ならわしの一存で工場の契約なんて即刻破棄してもええんや。とかむしろそれが普通やねん。それやのに優しいわしはこうしてお前にチャンスをやつとるわけや。そやろ？お前がそのわしのいうこと聞けへん言うんやったら、もうわしも好きにさせてもらうけど、勿論文句ないよな？」

「はあ…そんな…ああ…ゴクッ」

お母さんは黙った。そしてしばし後、腕を組んで社長に密着したまま首を捻り、二人の肩の間から後ろに視線を向けた。

続けて、僕の目を見て言った。

「ああ…明隆…こ…こちらの方はね…お…お父さんに代わる…お母さんの…あ…新しい…お…男です…新しい…はあ…彼氏…です…今日は…ああ…お…お母さんの大好きな彼氏と

の…で…デートに…付き合わせちゃって…ごめんなさいね…」

「!!!!!!」

さらに社長も僕を見て言う。

「なはは！そういうことや、明隆！今日はお母ちゃんと新彼氏のラブラブっぷり、これでもかっちゅうほど見せつけたるさかい、よく目に焼きつけるんやで（笑）♪がはは！」

二人は首を戻し、再び歩きだす。

「はあ…ああ…なあ…」

僕の呼吸は乱れ果てていた。二人の後ろをついていくのがやつとだった。

お母さんは勿論言わされたただけだし、その瞳の奥には僕に対する本音の謝罪の色が滲んでいた。でも視線を交わしたうえで彼女の口から直接そんなことを言われるのは、やはりただごとではない破壊力だった。動画とは比べ物にな

らなかった。

社長は僕とお母さん二人ともにこうして地獄の苦しみを与えるため、今日の同伴デートを企画したに違いなかった。改めて彼は一体、僕達になんの恨みがあるというのだろうか…。

今日一日こんなことが続くのかと思うと、目の前が真っ暗になった。本当に生きて帰れるのか不安だった…。

「おい見てみい清香！珍しいもん見れるで！」
突然社長が、ある檻の前で足を止めた。

「このレッサーパンダ交尾しとるで！がははは！」

その言葉通り、二匹の可愛いレッサーパンダが発情して下半身を叩きつけ合っていた。人間でいうと、立ちバックになるのだろうか。動物のすることはいえ気まずく、目に見ているのは恥ずかしかった。

だが社長は何故かとても愉快そうで、やたらとはしゃいでいる。

「ほら見ろ！見ろや、清香！やっとするで、やっとするで（笑）！思い切り交尾しとするで、あの二匹！な、見ろ見ろ！なあ！ちゃんと見てるか？」

「はあ…み…見てますよ…」

そしてそのうえで、とんでもないことを言っただった。

「なはは！…わしとお前みたいやな？」

「なっ！！！」

「……………」

僕は思わず飛びあがりそうになる。

お母さんは答えない。社長は続ける。

「ん？なんとか言えや？あの交尾しとするレッサーパンダ二匹、わしとお前みたいやなって聞いとるんやけど？ほら、上司の質問にはちゃんと答えな」

「…ち…違います」

お母さんは搾りだすように言った。僕的位置からは彼女の後頭部しか見えない。でもきつと、その向こうで苦虫を噛み潰したような顔をしているに違いなかった。

「なんでや？そっくりやないか？わしとお前もあんな風に交尾しとるやないか？」

「!!!!!!」

「はあ…し…してません…」

「はあ？なに言ってるねん？してるやんか？」

「…してませんよ」

「うそや？もう毎日してるやんか？丁度昨日も今のあいっらと同じ立ちバックでしたやんか？お互い我慢出来んと服脱ぎ散らかしてすっぽんぽんになって、あいっらみたいな獣の顔になって野性の咆哮迸らせて、もうばっこんばっこん交尾しまくったやんか？なあ？」

「!!!!!!」

「…し…してませんから…そんなこと…」

「ああ…ああ…」

とぼけたような社長の声と、必死で否定するお母さんの震えた声。当然二人の会話はすぐ後ろに立つ僕の耳にも届いていた。お母さんは僕に動画を見られていることを知らない。社長とセックスしていることを、息子に知られているなんて思っていない。だから極限的な危機に陥りつつも、白を切り通すしかないのであった。なんと痛ましかった。

そんなお母さんを、社長は追い詰めていく。赤裸々な表現を平気で堂々口にして。僕はその恐ろしさに寒気がした。今後僕達親子の関係がどうなったって、本当に知ったことではないのだろう。

「あんなあ、息子の前やからって嘘ついたらあ

かんぞ、お前？昨日かってあんなに乱れてわしのチンポ求めとったくせに。…もういっぺん聞
くぞ、わしとお前は毎日交尾しとる。そうや
な？」

「…違います…そんなことしてません」

「はあ？なにを今更遠慮することがあんね
ん？わしとお前は彼氏と彼女なんやぞ？それ
はもう息子も知つとるやないか？ほな交尾し
てて当たり前やろ？隠す必要なんてあるかい」

「…してません……してませんから…」

いよいよ社長の逆鱗に触れてしまうかもしれ
ない。それでもお母さんは頑なに否定してい
た。

例え動画を見ていなかったとしても、正直二
人のセックスが疑われる状況は既にあった。だ
から萌香やお父さんだって、もうそれに気づい
ているのかもしれない。

だとしてもお母さんは、自らの口でそれを認めようとは断固しないのだった。それくらい、彼女にとって大きいことなのだろう。

お母さんが、お父さん以外の男性と、セックスしているなんて…。

（…お母さん）

お母さんは譲らなかった。だが社長の方もおいそれとは折れない。いきなり気色ばんだ様子で。

「なんやねん！彼氏に逆らうとは生意気な女やのう！お前の立場っちゅうもんをわからせたるわ！ちよつとこつち来い！…おい明隆！お前もついてこいよ！」

そう怒鳴ったのだった。僕は恐る恐る二人のあとを追った。

たどり着いたのは、檻のエリアから離れた園内の端の方の場所だった。園路樹がいくつか植

えられていて、周囲からの視線は届きにくくなっている。そして今、近くに人の姿は全くない…。

そこで社長はいったんお母さんの体を離し、僕と正対させて立たせた。そのうえで自分はお母さんの背後に回る。

「…ゴクッ」

一体なにが始まるのかと恐れおののく僕の前で、社長は信じられないことをしたのだ。

「なっ！！！」

思わず声がでる。なんと社長はお母さんの後ろから両腕を回し、彼女の左右の胸を堂々と揉んだのだった。

：正面に立つ僕に、見せつけるように。

当然お母さんは両手でその腕を乱暴に掴み、即刻やめさせようとする。

「いやっ！やめて！やめてください、社長！」

だが社長は巨漢男の腕力でそれを許さない。

「あかん！お前はわしの女や！そんでわしはお前の男や！それは揺るがされへん事実なんや！もうそれを息子にちゃんと見せつけるんや！息子にわからせるんや！うりゃうりゃ！」

「はああん！いや！や：やめて！」

それでもお母さんは必死に抵抗するが、社長はびくともしない：。

「もう諦めえや清香！工場がどうなつてもええんか！ええっ！これ以上ということ聞かへんのやつたら、わしホンマに見捨てんぞお前らの工場！ええんか！お前はそれでホンマにええんか！」

「くっ：そんな：んん：いやあん：」

「もうちよつとや！今日一日我慢したらこの前のアホ夫の無礼はホンマに水に流したる！だから頑張れや、お母ちゃん！家族のためやろ

うが！せっかくここまで頑張ってきたんやろ
うが！なあっ！」

「くっ…なっ…いや…」

彼女の中で、よほど不本意なことなのだろう。
頬は真っ赤に染まり、表情は恐いくらい苦渋に
歪んでいた。そりやそうだろう。母親が男に胸
を揉まれるところなんて、絶対に息子に見せた
くないに決まっている。

だがお母さんは観念して、とうとう両手をお
ろしていた。無防備になった谷間丸見えの二つ
の豊満なおっぱいが、社長のゴツい手の中でぐ
にやぐにやと変形する。トップスの服もきつと
すごく薄い素材なのだろう。お母さんのおっぱ
いがいように弄ばれるその様子が、かなり明
瞭に僕の目に届いた。

「ああ…ああ…」

僕の口から、惨めな呻きが漏れる。僕はなに

も出来ず、後ろから胸を揉まれるお母さんをただ見つめていた…。

「なはは！やっと大人しいなったか！それでええんや！それでこそわしの女や！物分かりの良さはお前の美德やで、清香！がはっ！それにしてもいつ揉んでも柔らかいおっぱいやな〜♪マジ最高やで♪なははは！…おい明隆よう見い！お前のお母ちゃん、こうしてわしに思いつ切りおっぱい揉まれとんぞ（笑）？ほんでこの通り、もう全く抵抗しとらへん！がはは！わしらはこういう関係なんや。お前のお母ちゃんは、こうしてわしにいつも簡単におっぱい揉ませてくれる。もうそういう関係なんや。…お父ちゃんには内緒やぞ（笑）？がははは！それ〜れ！明隆のお母ちゃんのおっぱいをもみもみもみもみい〜☆☆☆☆」

「ぐっ！！！」

両脇に少し髪を残しただけの無惨なハゲ頭で、目鼻がひしゃげた醜い顔面のチビデブ親父が、お母さんの大きな胸で好き放題遊びながらその肩越しに僕を見てニヤリと笑った。一方のお母さんは悔しそうな顔でずっと目を伏せていた。僕の方なんて、見られるわけがなかった。

だが社長は容赦ない。そんなお母さんに耳打ちして、また僕になにかを言わせようとする。

「はあっ！そんな！む…無理…さすがにそれは無理ですよ！」

「にひひ…だからもう諦めろって清香…お前は今日一日息子の前でわしの完全言いなりにするしかない…それしか工場を救う術はないんや…どんなえげつないことであってもそうするほかもうないんや…お前も覚悟して来たはずやろ？…お前が一番望んでるもんはなんなんか…お前が一番優先させたいことはなん

なんか…よう考えてみいや…なあ？」

「はあ…ああ…」

囁くような社長の声を、お母さんはどこか神妙な面持ちで聞いていた。

ややあつて。

「…ゴクッ」

なにかを決意するように、彼女は唾を飲み込んだ。続けてゆっくり顔をあげ、この体勢になつてから初めてちゃんと僕の目を見た。

「ああ…お…お母さん…」

お母さんは眉を落とし、僕に対して本当に申し訳なさそうな顔をしていた。

『…本当にごめんね明隆…たくさん苦しめちゃつて…でもお願い…絶対工場は…家族は…お母さんが守るから…だからもう少しだけ…我慢して…』

その表情が、そう語りかけているように感じ

た…。

そして。

お母さんは動いた。

「なっ！！！！！」

飽きもせず、僕は間抜けな声をあげる。お母さんは、両手で鮮やかな青色のミニスカートの裾を掴み、それを静かにたくしあげたのだ。

まるで、そのスカートの内側を、正面の僕に見せるように…。

「はあ…ああ…ぐっ…なあ…」

そして目の前に現れたものの自体にも、僕は恐怖交じりの呻きをあげずにはいられなかった。お母さんはパンストの下に見るからに妖艶な総レース仕立ての、とても薄そうな真っ黒のパンティーを穿いていたのだ。布面積も極端に小さくありていに言えばすごくエッチな下着で、アラフォーの地味なお母さんの私物ではない

のは明白だった。気がつかなかったけど、朝工場に社長が迎えにきた際、お母さんは下着まで替えさせられていたのだった。

さらにお母さんは口を開く。僕の日を見つめ続けたまま。

さつきまでの表情とも少し違う、今にも泣きだしそうな、とても苦しそうな顔になって…。

「はあ…明隆…お母さんは…こちらの彼氏と…セックスをしています…」

「!!!!!!!!!!!!!!」

「ま…毎日のように…に、日常的にしています…はあ…お…お父さんっていう正式な伴侶がいるにもかかわらず…だ…大好きな彼氏への…あ…溢れる愛を抑え切れず…はあ…もう普通に…セックスしています…ほ…本当にしています…んんっ…ゴクッ…きよ…今日も…で…デートの後の…はあ……か…彼とのラブラ